田村志津枝さん コラム　text = Shizue Tamura

PICK UP MOVIE

『1640日の家族』

［2021 年／フランス／フランス語／ 102 分］
監督・脚本：ファビアン・ゴルジュアール
出演：メラニー・ティエリー、リエ・サレム、
　　フェリックス・モアティ、ガブリエル・パヴィ

子供たちを
社会が見守る

子供が生まれてから独り立ちするまでには、親にも子にもいろんなことが起きる。当事者が手いっぱいになってしまったとき、手助けしたり寄り添ってくれる社会であったら、どれほど幸せなことだろう。

この映画は冒頭から楽しげな家族の姿でいっぱいだ。末っ子のシモンは母に可愛がられ、姉と兄の後を追いながらもつれ合って遊ぶ。だがそんな日々に変化が訪れる。シモンはもともと里子として 1 歳のころこの家にやってきたのだ。

シモンは生後間もなく母を亡くした。父親は独力で子育てするのが無理だったので、シモンは里親に託された。5 年近い月日が流れ、実の父親は悲しみの中から立ち直り、シモンを自分で育てることに決めた。

フランスでは里親の国家資格があり、職業として成り立っているという。里親は研修で専門知識を身につけたうえで、福祉関係者と意見交換をしながら子育ての一環を担う。この映画のなかのシモンの里親アンナも、福祉の専門家らと連携してシモンを育ててきた。シモンも、幼いながら自分の境遇をきちんと理解して暮らしている。

とはいえ、シモンが実の父親と暮らし始めるためには、それぞれが辛い別れを受け入れ、新しい生活に慣れなければならない。とくに難しいのは感情のコントロールだ。移行期に出会うさまざまな困難を、幼いシモンをはじめ周囲の人々が、相手を思いやり、自分の感情を抑制し、何が大切かを問い直しながら進んでいく様が心に響く。微妙な感情表現を 3 人の子役から引き出した監督の演出、および親たちを演じた俳優の演技は秀逸だ。

日本では昨今、幼い子への虐待など悲しいニュースが後を絶たない。子供を愛情をもって冷静に見守れる成熟した社会を作っていくには、たくさんの課題を克服しなければならないことを、この映画は教えてくれる。

田村志津枝プロフィール：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983 年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。